

- ▼ ズィリエカ=イシュトゥルーム式外世界領域観測機所属報告書データベースへようこそ
- ▼ ログインしてください

- ▼ 認証完了。ようこそ、ズィリエカ技術中佐

- ▼ リクエスト受信中……
- ▼ 検索条件《Z-I 特異》《最終更新:3 日以内》に合致する結果 十件 を表示します

- ▼ Z-I 特異報告書《第〇〇八三番世界領域》を開きますか？

- ▼ しばらくお待ちください……

長針が12を指し、6を指す短針と直角を成した。見回りなんかいるはずもないけど、それでも音をたてないように、暗い校舎を慎重に歩いていく。

街の中心部からはちよつと離れて、山の中腹くらいにあるこの学校。目指すはその屋上だ。

階段。

慎重にのぼり、窓のない鉄の扉を認める。錆びかけのドアノブに手を回す。押し込む。いやに重い。

耳に残る嫌な金属音が、静かな校舎に沁みていく。

屋上。雨晒しのタイルは割れ、雑草がタイルの境界を縁取っている。まるで人を拒否するその空間、その向こうの方に、誰かがいた。近寄る。

「……珍しいね」

月明りを背中に受けてわたしを見たのは、見たこともない女子だった。少し時代錯誤な学校制服に身を包み、天体観測をしているらしい。望遠鏡のついた三脚をいままさに開かんとしていたところのようだ。

「ええと、ここには、ちよつと、探検で来たのですが」
子供みたくない言い訳をした。しばらくの沈黙があつて、
「名前は」

当然の質問が返ってきた。

「アルハです」

何の苦労もない会話。

「a?」

お決まりの聞き間違え。

「それでいいです」

「成程。ギリシア文字とは趣深い。私は氷川。そうだな、ならば私はデイガンマさんと呼んでくれ」

ここで初めて、意外な返答。ガンマ線と呼んでくれ？

「ガンマですか？」

「違う。デイガンマさ」

何ですかそれ。

「そんなの無いですよ」

「無くていいのさ。君からしたらな」

面倒くさそうだ。話を变えたい。

「はあ。じゃあ、デイガンマさんは何をしてるんですか」

「見ればわかるだろ。天体観測だよ。この空を、宇宙を見てるんだ」

そう言ったデイガンマさんは、手を広げてその場で一回りして見せた。別に裾上げしているわけでもなさそうなのにスカートはひざ丈よりも5センチほど上の長さだから、遠心力でひらひらする裾はちよつと危なげ。足はか細く、見るだけで大して運動してないのがわかった。

その日の空はやや曇りがかっていた。きれいな月は満ちていて欠けたる所もなくよく見えるが、あと見えるのはたぶん一等星とか二等星とかだろ。天体観測にさして興味はない。今日ここに来たのも、あくまでも探検だ。子供染みた言い訳であることは事実だが、本当のことだ。

もう冬に入っているから夜風が寒い。だが多分季節的には天体観測には向いていたりするのだと思う。天气的にはお世辞にも向いているとは言いがたいけど。

三脚と望遠鏡は共にかなりちゃんとしているように思える。それをよしよと設置して他のアイテムを用意しているのを見ると、見てはつかじやなく手伝えと言われそうな気がしてならなかったが、そんなことは言わ

れない。デイガンマさんは黙々と作業をしている。

流石にオリオン座とか冬の大三角くらいは分かるが、それ以外の星座は分からないし、冬の大三角がわかってもベテルギウス以外の二つ、つまりシリウスとプロキオンが何座なのかも知らない。銀座とか築市楽座とかでないことだけが明らかだ。あとどっちがシリウスとどっちがプロキオンなのだろう。明るい方がシリウスとは言うがはつきり言って明るさなんかたいして変わらない。気付いたら寝ていたらしく、私は毛布を掛けられていた。だが掛け布団の概念があっても敷き布団の概念がデイガンマさんにはなかったようで、おかげで腹痛と風邪をこじらせることになった。

病気をひかされたにもかかわらず、それから私はたしか毎日あの校舎の屋上へと足を運んだ。気になったのはデイガンマさんがあまりにも謎な人物ということだ。21時はもちろんのこと、かなり早く行ってみても、デイガンマさんは先について、しかもちようど準備をしている最中なのだ。まるでここに住んでいるかのように。まるで私を監視しているかのように。

この疑問はなかなか解決しなかった。デイガンマさんには何度も質問をして、人となりを知りたいと思っていたのだけど、デイガンマさんが絶妙に答えをくれない。どこに住んでいるんですかと聞いてもココだよとしか言わない。何年生ですかと聞いても見ての通り女子高生さと言う。掴みどころがないというかなんというか、デイガンマさんは私より淡泊な人間だった。まるで人間でないような、俗世と衆生に何のこだわりもないかのようなJKの流行りだつて知ってるのか知らないのかわからないがとにかく触れようとしないう言動からは流行りな

ど何も感じない。まるで現代に生きていないというか、生きているかも怪しい。淡泊というよりもひよつとした起伏がないと言った方が正しいかもしれないように感じた。それを伝えると、「はは、それは随分酷いなあ」と言うだけで、乾いた笑いを見せてくれこそすれ、怒ることとは終ぞなかった。

初めて会って半月が経った。もう風邪っぽかった体調はすっかり良くなっていたが、今日もデイガンマさんは先だった。ほんと、こんな大きなものを毎日担いでこんなところに来るのなんて想像するだけでいい運動になつてしまふそうだ。寒いし。

でも、ここ、いっしょでの天体観測は、しばらくはお預けになつてしまふかもしれない。というのも、

「ここ、工事が入るみたいですよ」

「らしいね。明日から、だそうだ」

というわけだ。噂に聞いてはいたのだが、この校舎に全面的な工事が入るらしい。そうなればその期間中は、屋上どころか、校舎の敷地に入ることもすら難しいだろう。しばらくは天体観測はできないし、私もデイガンマさん観測はできない。

「お別れ、ですか」

たった半月の交流でありながらも、別れというのは感傷的だ。だがデイガンマさんは何事でもないようにせつせと普段通り観測器具を設置していく。だからその次の言葉は、久々の意外な返答だった。

「そうなるね。…寂しいな」

私の聞き間違いでなければ、確かに寂しいと言った。デイガンマさんもセンチメンタルを抱く、一介の少女だつ

たのだ。

どんなに大きな発見をしても、世界は止まらないし、止まったこともない。星は巡る、ただいとも通りに。

「昔はここも明るかったから、そんなに星も見えたもんじゃなかったんだけど、今となってはよく見えるだろう、ほら」

デイガンマさんは昔話を始めた。そんなものが語れる年齢じゃないと思うのだけど、先祖代々観測者だったりするのだろうか。

そういえば、デイガンマさんはなんでここで天体観測をしているのだろう。毎日観測しているということは星空に何か心惹かれるものがあるのだろうか、自分にはそのような表情を見て取ることはできない。

「そうですね」

「ずいぶん反応が薄くはないかい」

「いや、あんまり夜空を見ることが無くて」

「そりゃいかん。ほらちよつと昔に流行ってたろ、上を向いて歩くんだよ」

「ちよつとどころじゃなく昔ですよ、それ」

そうしてツツコミを入れると、デイガンマさんは黙りこくった。いつものことなのだがやはり何か不興を買ったのではないかと怖くなる。今日は心なしがちよつと不満げな表情をした、気がした。

夜がしんと更ける、という表現はなかなか綺麗だと思う。確か漢字で深深と書くのだが、静かな夜にはどうしてか、「深い」という概念がよく似合う。

いつものことながら、デイガンマさんは天体観測を一心不乱に続けている。私はそれを見ながら、望遠鏡なし

で夜空を眺めたり、遠くの夜景に目を遣ったり、持ってきたスcoopやお菓子に手を付けたりする。デイガンマさんから話しかけてくるのは多くはないが珍しいというわけではない。でも今日はちよつと数が多いように感じる。

「え、やっぱり今日はどうも変じゃないか」

こんな風に。

「え、そうですか」

「ああ。多分工事だからお別れですねという会話の後あたりから」

しばらく考える……までもなく、そこでは私にとっての重大件があった。

「ああ、ならきつとデイガンマさんが『寂しくなる』って言ったからですね。デイガンマさんがああいうことを言うのは、不思議ですね。感情なんて表にめつたに出ないのに」

ごく当然のことを言ったつもりだったが、返答は意外なものだった。

「えっ」

なんと、デイガンマさんが目を丸く口をわずかに開けてこちらを見たのである。珍しいどころの話ではない。

明日は天災でも起こるのかもしれない。当然、返答は戸惑いをもったものになる。

「え、なんですか」

「感情が、出た」

「出ましたよ。寂しいって言ったじゃないですか」

なんと、感情が出ていたことを意外に思ったのは私だけではなかったらしい。自覚がなかったのか、それとも隠していたのがバレたことに驚いたのか。

「寂しい…そう、なのかな」

「何です、自覚なかったんですか？ デイガンマさんも

素直じゃないだけで人間味があるんですね。起伏がないから、まるで死んだ人間みたいだなんて思ってたのに」

「…前にも聞いたな、それ」

「あれ、そうでしたっけ」

「ああ」

「…：酷いよ、君は」

また寝ていた。私にはどうして天体観測で夜を丸ごと潰せるのか、半月も費やして結局全く分からなかった。

初日に文句を言って以降、デイガンマさんは敷き布団の概念を思い出したままでいてくれた。毎度毎度申し訳なくて洗濯して返しますと言うのだが、構わないからと押し切られている。

払暁。冬の早朝は霜が降りていようがないからうがとかく寒くなきやいけな、と誰かが言っていた気がするが、寒すぎるのも考え物だ。ビルのせいでデコボコの地平線(じゃあ地凸凹線じゃないか、と後で思った)が、夜の暗さで見えなかった時に想像していたよりもずっと近いところにあつて、世界の狭さ、あるいは昼の浅さを感じる。底に足を付けられる、浅さゆえの安心感は、昼も悪くないと感じさせてくれる。

デイガンマさんは片づけを始めていた。そしてそれを眺める。ちよつと手伝う気分になったら手伝ってみる。

「そういえば、最後までおうちを教えてくださいませんか、たね。デイガンマさんともつと天体観測がしたいんです。私。諦めて教えてくださいよ」

「住所？ だから、ここだって」

「また、そんなこと」

「本当なだけどなあ」

「…もういいです。また、天体観測しましょうね」

「機会があればね」

「…馬鹿。…それじゃあ、またいつか」

「ああ、さよなら。…」

「私の方をずいぶんじっと見て、どうしたんですか？」

「ああいや、何でもないんだ。さよなら」

「ええ。また」

「ああ。…さようなら」

デイガンマさんの言葉を最後にして、私達は別れた。

冬の風が沁みた。

*

さようなら、もう会うこともないでしょう。それだけのことが言えなかった。情けない話だ。

満月から半月。弦月を通り越した先の夜。

新月は、私たちを照らさない。

神様がいるなら、願わくはまたと会いたいなあ、と一瞬だけ思ったのだが、そんなことはできないとすぐに思い知る。

そうだ、神様なんていない。

知ってた、知ってたさ、そんなの。

…そんなの。だけど、だけど――

「…天に逆らって浮き世に留まる私が、神様に縋るだ

なんてさ……………」

そんな傲慢を通そうとするから。

「—あの子がっ、あたしをつ、見て、くれるからっ…………」

「あたしは…………一緒にいつ、ウっ…………居たかった、だけ

なのっ…………」

そんな幻想に、浸っていたいと願っていた。

屋上で、少女はうずくまる。

彼女がいくら叫んでも、もう、誰もいない。

…………いないのだ。

…………

錆びたドア。

草ぼうぼうの屋上。

埃だらけの廊下。

割れた教室の窓。

倒れた図書室の本棚。

…………

そう。

ここは壊れた校舎。

何十年か前に閉鎖して、今日までは解体もされず。

そんなところには、誰もいない。

…………

だれも。

…………

Good End lol

XD

《メモ》

[DELETED]

——ハル・イシュトウルーム、統一歴283年10月20日

[UNKNOWN USER]による編集

——統一歴283年10月24日

※ 最終更新 統一歴283年10月24日